

# 県内受け入れへ前進

## 広域処理へ被災地がれき視察

東日本大震災で発生したがれきの広域処理が、なかなか進まない。復興への妨げと誰もが知りながら、放射性物質への懸念が根強い。そんな中、県と県市長会、県町村会の三者は先月20日、広域処理に向けて協力することを合意。同27日には鈴木英敬知事と市長会会長の亀井利克名張市長、町村会会長の谷口友見大紀町長が宮城、岩手の両県を訪れ、がれきの仮置き場などを視察した。最終処分場の確保など課題も抱えるが、県内での受け入れが一步、近づいた。(県政・森川静香)

## 亀井、谷口会長「安心した」

### 最終処分場確保など課題

岩手県では、県内の一般廃棄物の十年分に当たる約四百三十五万トのがれきが発生した。このうち、今年三月までに処理できたのは四十九万トで11%。連増拓ならぬと訴えた。

一行が訪れた同県宮古市の仮置き場には、高い所で十二メートルのがれきが積み上がっていた。分別もこれからの状態、鈴木知事は「全然進んでない」と顔をしかめた。同県の担当職員は、がれきを仮置きする平地を探すのが大変で、漁場やふ頭を使わざるを得ない」と説明。鈴木知事は三重県でも同様の心配があるという、「漁業者の精神面を考

えると(仮置き場の問題は大きいと、あらためて感じたと語った。この仮置き場のがれきは、先月二十三日から秋田県大仙市が受け入れを始めため、搬出前の状態を確認できた。鈴木知事も自ら計測機器を当て、がれきの空間放射線量を測定。健康被害の心配もないとされる毎時〇・〇六マイクロベルトだった。

視察後の取材に、亀井会長は「かなりきちっと管理されている」と評価。「現地に伺っていただく、住民説明もきちっとできる。受け入れを検討いただく自治体には、率先して出向いていただけるよう、お話をさせていただく」と述べ、調整への意欲も見せた。谷口会長も「思った以上にきちっと整理されてい

る。現地で見ただけでいい」と同調し、「安心した。私としては受け入れても、と思う」と胸中を明かした。宮城県はこの大型連休明け、岩手県は今月下旬にも広域処理の必要量を精査する予定。三重県と市町は現在、県内処理をする際のガイドライン作成に取り掛かっている。素案では、放射能濃度を一時当たり一〇〇〇以下、焼却灰については二〇〇〇以下とし、国よりも厳しい基準を設定した。

県内の各市町でも具体的な検討が進んでいる。ただ、最終処分場の確保をはじめ、県がリーダーシップを取って解決しなければならぬ課題も多く残る。県と市町が一体となって取り組むがれき処理での「三重県方式」の成否が分かれるのは、これからだ。



がれきの放射線量を測る鈴木知事(左端)と岩手県宮古市で